

NHK 全国方言資料（石川県石川郡白峰村白峰）改定と注釈

新田 哲夫

1 『全国方言資料』について

日本放送協会編『全国方言資料』（以下、NHK 全国方言資料）は、管見では以下に示すとおり4回出版されている。

- (1) 『全国方言資料 1～9』昭和34年3月～昭和41年11月、非売品
- (2) 『全国方言資料 第1巻～第11巻』昭和41年9月～昭和42年5月（1巻～9巻）、昭和47年7月（10巻、11巻）、ソノシート付き
- (3) 『カセットテープ 全国方言資料 全11巻』昭和56年4月
- (4) 『CD-ROM版 全国方言資料 全12巻』1999年4月

(1)～(4)は、序だけが異なり、まえがき、方言の特徴を述べた項、文字化資料の内容は同一である。(1)の序には、この事業は放送文化研究所（後にNHK総合放送文化研究所）によって昭和27年8月に始められ、方言の録音収録は、昭和33年に「内地一般型方言」の収録を終え、昭和37年に「へき地・離島方言」の収録を終了したとある。その後、昭和40年から南西諸島（琉球）の収録が始まっている。最初は奄美諸島から始めたとあるが、後の沖縄本島やその周辺部の島々の方言を収録したのは、まだ米国の占領下の時代である。

(1)は表紙、背、扉に「NHK音のライブラリー」の印字があるもので、「方言録音の利用上の参考に資するための表記記録」、「レコード化と並行して、昭和34年以降その活字化をすすめているもの」とある（序1頁）。録音資料はついていない。また、非売品である。筆者は『全国方言資料 2—関東・甲信越編—』（昭和39年3月）と『同 3—東海・北陸編—』（昭和39年9月）、『同 7～9—へき地・離島編（I）～（III）—』（昭和40年3月～昭和41年11月）の5冊のみ閲覧し得たが、それ以外の巻は未見である。(3)の各々の巻の序によれば、昭和34年3月に『東北・北海道編』から刊行が始まったとある。

(2)はソノシートで付きのもので、『第4巻近畿編』が昭和41年9月20日付けで出された。その後、『第1巻東北・北海道編』、『第6巻九州編』、『第3巻東海・北陸編』、『第5巻中国・四国編』、『第2巻関東・甲信越編』と続き、『第7巻～9巻へき地・離島編I～III』それぞれの巻が昭和42年の5月まで順次刊行された。時期が飛んで、昭和47年7月20日付けで『第10巻琉球編I』と『第11巻同II』が出そろい完結した。各巻の序にあるとおり、「昭和27年8月、全国各地の方言を収集する作業に着手した」とあるから、完成まで20年の歳月を経たことになる。記録した地点は全国141地点である。

(3)はカセットテープ付きのもので、昭和56年4月10日付けで全11巻が一挙に刊行された(第7巻～9巻の名称が「辺地・離島編Ⅰ～Ⅲ」に変わった)。最初の版のソノシートには、テキスト文字化部分の半分くらいの録音しか納められていなかったが、2回目の版のカセットテープには、文字化部分全てが収録された。

(4)は1999(平成11)年4月25日付けで『CD-ROM版 全国方言資料全12巻』として出された。旧版の1巻がそれぞれCD-ROM一枚に対応するが、1巻分増えたのは「序・索引編」が加わったためである。この巻には、金田一春彦氏による概説「方言とは」他が映像で納められており、また地図索引、地名索引、自由会話索引が付いている。12枚のCD-ROMには、PDFファイルの形式でテキストと音声資料が納められている。有益なくつかのリンクがはられていて、索引、地図からテキストへ飛ぶことができる。付属の解説書によれば、PDFファイルのテキストは(3)の『カセットテープ 全国方言資料』をもとにしたとある。また、音声はカセットテープからではなく、NHKが保存している音源をデジタル化したとある。

このような録音資料の出版メディアがソノシート、カセットテープ、CD-ROMと変遷したのは時代の流れを実感する。特に(4)でデジタル化されたことは大きな変革である。

2 白峰村白峰方言のテキスト

本稿が対象とするのは、『第3巻 東海・北陸編』に納められた「4 石川県石川郡白峰村白峰」のテキストのうち、123頁から139頁の「音韻おぼえがき」、「自由会話1 お盆と台風」、「自由会話2 食物の話」である。後の140頁から153頁の「あいさつ」は紙面の関係で次稿にまわす。

テキストは3度目の出版の『カセットテープ 全国方言資料』(実質全ての版のテキストの内容は同一である)、聞き直した録音はカセットテープによった。「自由会話1 お盆と台風」は3分15秒、「自由会話2 食物の話」は3分03秒の録音である。聞き直し作業の実際は、カセットテープの音声をMini Discにダビングし、必要な部分にインデックスを付けて、頭出しが容易になるようにした。1950年代の収録は、おそらくオープンリールの大きな録音機や巨大なマイクロフォンを使用し、聞き直し作業も容易でなかったと想像される。それと比較すれば、現在の聞き直しの外的条件は格段に向上している。このような機材の条件、また古い形を多少とも残している地元の協力者が存在している現在こそ、聞きなおしの作業を行なうべき時期であるといえよう。

3 聞き直し作業の協力者

本稿の聞き直し作業は、主として白峰生まれの竹トシエさん(1925年生まれ)に協力を

お願いし、一部、加藤継満津さん（1923 生まれ）の協力も得た。

4 改訂の意味

もとのテキストの文字化は誰によってなされたかは不明である。本稿の対象とする第 3 巻、およびその他の巻のまえがきに「収録後の処理として、保存する自由会話やあいさつのカタカナ表記とその共通語訳を、現地で出演者または村の協力者たちの立ち会いの下で行なった」（9 頁）とある。また、同まえがきに「東北地方から後の収録には、専門家の同行（もっとも中央の方言学者に限らず、地方の専門家のもよいわけである。たとえば、大分・高知・愛媛・福井・静岡ではその土地の専門家の同行を得た）を中止した」（10 頁）とあり、括弧付きの県名に石川の名前はない。つまり、地元での文字化作業は“専門家”が行ったのではないようだ。ただし、序に「柴田武・加藤正信氏の監修・校閲をお願いした」とあり、また、まえがき 9 頁では「金田一・柴田両先生に整理・訂正の手を加えていただき、一応の表記の形態を整えた」とある。また、「東海・北陸地方方言の特徴」（15～23 頁）では執筆者として柴田武氏の名が見られる。

これらから推定されるのは、白峰に収録に向いた NHK の担当者が、現地で白峰の人たちの協力を得て文字化し、それを持ち帰り、柴田武氏と金田一春彦氏（あるいは加藤正信氏も）の訂正、整理、校閲を経てできたものではないかと思われる。これらの過程で金沢大学名誉教授の岩井隆盛氏の名は見られない。氏は収録後に出版される『白峰村史下巻』（昭和 34 年(1959 年)）で「白峰（牛首）方言概要」、『同上巻』（昭和 37 年(1962 年)）で「白峰方言の分布と変化」を執筆された方である。岩井氏の協力があったかどうかは、氏が鬼籍に入られた今では直接確かめようがない（*専門家の同行を得たと述べられている福井では、故佐藤茂氏が文字化も担当されたことを聞いている）。

本稿の対象とする録音は昭和 31 年(1956 年)になされており、50 年近い年月を経たことになる。今回テキストの改訂を試みたところ、自由会話 1、2 の 6 分あまりの会話において、訂正箇所は 100 箇所を超えた。これらの異同の多くは軽微なものであるが、中には言語学的に看過できない重要なものも含まれている。

例えば、台風の被害を語る場面 128 頁 5 行（方言のカタカナ表記と共通語訳のセットで 1 行とする）で、突然「モム」という動詞が現れるが、その意味は「風があちこちの方向から吹いて荒れる」である。古語では一般的でも注記が必要であろう。133 頁 1 行「オゴッテ」は「(食べ物) 今では何でもオゴッテ」の文脈で現れ、これを「ぜいたくで」と訳してあるが、正しくは「選り好みして」である。「ぜいたく」と「選り好み」は隣接する意味だが、オゴルという動詞が現れたことに注意すべきである。また、補助動詞としてトル(125 頁 1 行)、ヨル(127 頁 7 行)を記録するが、実際には専ら Chol が用いられている。ま

た、126頁9行アルザー、145頁7行(次稿)ヨカローダイで記録されているものは、実際は終助詞ザイ(～じゃないか)であり、その存在を捉えていない。127頁4行、127頁10行から128頁1行にウリシトオッタを「うれしいと(思っ)ていた」とみなしているものが、実際にはウリシテオッタのような「形容詞テ形+オッタ」、すなわち形容詞のような状態性の語にオルが付属する形式であることなどを捉えていない。

白峰方言は故岩井隆盛氏の報告や筆者のこれまでの調査によれば、現代日本語諸方言の中でも特異な性質を有し、共時的な観点からも通時的な観点からも非常に重要な方言の一つと考えられる。この方言の談話を含めたあらゆる分野の正確な記述は将来的にも大きな意味をもつと信ずる。また、近年、方言文法の研究が盛んになり、体系記述の証左となるような文例をこのような談話資料に求めることが多い。これらの研究に資するためにも、なるべく誤りのない資料を提供すべきかと思われる。

5 「音韻おぼえがき」について

今回取り上げるテキストの冒頭は白峰村白峰の地理的な概要に加えて、「音韻おぼえがき」がある。それはつぎのようなものである。3)の表記は現在のものに改めた。

- 1) 4つがなの区別もなく、ズーゾー弁でもない。
- 2) 語中の[t]が有声化する。例、[hatake] 畑。
- 3) セ・ゼは [s'e][z'e]。
- 4) 共通語の二重母音アイに当たるところに[æɪ] があらわれる。
- 5) 語頭のエは [je]。
- 6) 語中のガ行子音は[ŋ]。

これらについて、筆者の話者を観察した結果と比較する。

1)に関しては筆者の観察と一致。2)については音韻的なものではなく、語彙的な現象であろう。例えば、肩[kata]、糸[ito]、見て[mite]などの他の例では[t]が現れる。3)については筆者の観察と一致。この方言のセ・ゼの口蓋化は、周囲の北陸方言と比べて顕著ではない。4)は一貫したものではなく、音声的な現象として一時的に現れる程度。5)は現在では聞かれない。過去において存在していたものが消滅したものか、あるいは当時の音声的な現れを記録したものかは不明。6)については筆者の観察と一致。

その他、注記すべき特徴として、ツ[t'u]、ヅ(ズ) [ðu]~[zu]がある。1)と関連するが、今回とは別の話者(1926年生、女性)で「鼓」と「涼み」のヅとズが[t'uðumi]、[suzumi]の差となって現れることを観察したことがある。これは前の無声子音と同化して現れたもので、おそらく四つがなの区別ではないであろう(例えば、「づ」の仮名をもつ「水(みづ)」は[miðu]または[mizu]である)。これまで白峰でヂ/ジ、ヅ/ズなどの仮名を発音で区別す

る意識をもつ話者に出会ったことがない。また、「サ、ソ」「ザ、ゾ」の子音がしばしばで [θ][ð] で現れるが、[s][z] も聞かれ、それらが現れる環境の差はどのようなものか把握していない。また、北陸方言で一般的な [k^w]、[g^w]、[ŋ^w] の音声は現れない（白峰では、菓子 [kafi]、外国 [gajikoku] など）。

この「音韻おぼえがき」に限らず、後のテキスト本文に対する脚注で述べられている音声に関するものは、全般に音韻論的な観点からなされたものではない。これは音素の確定を念頭に置いた現地調査ができていない状況では致し方のないことである。

6 改訂と注記の表記法

6.1 行番号と話し手、ゴシック、下線、注記

改訂を提示した節では、テキストの頁を括弧(p.---)で、行番号と話し手の性別を m/f を [] で表した（例：[8m] は 8 行目男の会話）。なお、行番号は方言文と共通語訳をセットで 1 行と数えた。筆者が改訂した方言文、共通語訳はゴシックで表した。また、筆者が確認したものと元のテキストとが異なる部分について、必要に応じて下線を引いた。ただし、小さい異動に関しては下線を引かなかったものもある。筆者の注はポイントを落として行ごとに本文の後に付した。注の中では、参照すべき本文の頁と行を 123-5（125 頁 5 行）のように表した。いくつかの注は方言概説を兼ねたやや長いものもある。124 頁 4 行「接尾辞ラ」、126 頁 1 行「～ンナンの義務形式」、126 頁 5 行「のだ形のヤ」、136 頁 2 行「所有のガノ」など。

6.2 共通語訳のスタイル

これまでの筆者の観察では、白峰方言には会話のスタイルに顕著な男女差があるわけではない。もとのテキストの共通語訳では、女性の小田きくさんの会話をいわゆる「丁寧体(デスマス調)」で、男性の山下文太郎さんの会話を「普通体(ダ調)」で訳しているが、男女差の少ないこの方言の実態を反映したものではない。本稿では、自然な共通語訳とならない場合もあるが、なるべく普通体に統一した。

7 内容に関する特記事項

7.1 自由会話 1 「お盆と台風」について

自由会話 1, 2 とあいさつの収録は、1956 年の 8 月 18 日の記録である。録音時は盆過ぎであるのに、これから行なわれる盆踊りの話をしているのは、白峰の盆踊りは例年 9 月 13 日に行なわれていたからである（現在は 9 月 15 日）。9 月に行われるのは、8 月は養蚕

(夏蚕)の繁忙期にあたったというのが理由の一つと聞く。9月13日の祭りは「盆祭り」と呼ばれる。この盆祭りの時期には、出作り(山に小屋を建て焼き畑を行う)の人たちもいったん山を下りる。また、労働賃金が支払われ、店の‘つけ’などの精算が行われる。白峰の盆踊りは、村内の八坂神社の境内が会場で(現在は総湯広場前)、夕方から始まる。踊りの日の朝昼ないし前日には奉納相撲が行なわれる。自由会話1で二人の話者が相撲に触れているのはその相撲のことである。また、この時期に、寺では永代経が読まれ、多くの人が寺に集まる。これらは村民の楽しいイベントの一つになっていた。この自由会話1では、8月に来た季節はずれの台風と9月の盆踊りへの影響を話し合っている。天候などの理由で、盆踊りが中止になったことが、これまで何度かあったという。このことを二人は気にしているのである。

7.2 自由会話2「食物の話」について

この自由会話2に現れる食物は、イリコ(ここではカマシイリコ。「カマシ」とは稗の一種でシコクヒエのこと。穂の形が「鴨足」に似ていることから命名という。カマシイリコはカマシの粉を挽いてそれを炒り、湯で粘るくらいまで溶いた食べ物)、イー(稗だけの飯。稗と米の混ぜ飯はイーママという)、ママ(米の飯)、イワシ(鯛)とニッシン(鯨)(鯛も鯨も糠漬け)、クキ(葉付き大根の塩漬け)、コメ、シル(味噌汁)、ミソに及び、昔の食生活を懐かしんでいる。また、食に関わる道具も、ムサマス(やや小ぶりの杓)、メンパ(木製のいわゆるタッパー)などが登場する。食物のことが中心に話が進むが、子どものときに自宅の雪かきの手伝いをしたこと、村一番の分限者、山岸十郎右衛門の家に労働奉仕に行った親の代わりに、ヨケ(夕食)をもらいに行った思い出を語っており、当時の子どもの労働の様子がわかる。また、白峰村に存在していた社会階層、ジナゴ(地名子=小作)とオヤッサマ(地主、ただし山岸家は特別にダンナサマと呼ばれていた)との関係も具体的に語られている内容となっている。

7.3 「あいさつ」について

今回は紙面の関係で取り上げることができなかった。次の稿で述べる。

7.4 テキストの話し手

会話は主に男女二人の話し手によってなされている。テキストには、話し手の一人、山下文太郎さん(明治26年(1893年)生)の職業は農業とあるが、石工でもあった。昭和38年ごろ亡くなられたという。また、女性の小田(こた)きくさん(明治25年(1892年)生)も農業ほか、お宅が雑貨商小田又七(こたまたしち)商店を営まれていて、その店の愛想のいいおばあちゃんとして有名な方だった。昭和61年1月に亡くなられた。「2. 食物の話」で

冒頭一言だけ登場する加藤勇京(ゆうきょう)さんは明治 29 年(1896 年)、白峰村赤岩(字白峰より 14 キロ上流の村、現在は廃村)生まれ、木炭・林産物の検査員、後に簡易水道浄水作業場の機械室管理の仕事をしていた(小倉学編『全国昔話資料集成 4 白山麓昔話』1974、岩崎美術社 p.309 より)。加藤勇京さんは、この『白山麓昔話』で 20 話の民話の語り手を務めている。80 歳前後まで存命だったと聞いている。

8 本文改訂と注記

8.1 自由会話 1 お盆と台風 (pp. 124-131)

(p. 124)

- [1f] アンナ ポンガ キテモ オ オモシロナイニャ コリヤ
コンナ ポンガ キテモ オモシロナイニャー コリヤ
 あんな 盆が 来ても おもしろくありませんね、これは。
こんな 盆が 来ても おもしろくないね これでは。

アンナ：アンナかコンナかはっきりしない。

ニャー：文末詞。多用される文末助詞。文中の間投詞ではナイとも。ナイはニャーと母音が融合する前の形であろうか。

- [2m] オモシロナイ オドリモ デキンワ コリヤ
 オモシロナイ オドリモ デキンワ コリヤ
 おもしろくない。踊りもできないね、これは。
 おもしろくない。踊りもできないね、これでは。

デキン：アクセント HLL で古いタイプの京阪アクセントと同じ。デキル、デキタ、デキンも HLL。白峰方言では 3 拍 1 段動詞の基本形は HLL / MHM の 2 項対立で、デキルはこの一方が実現したもの。

- [3f] ヨワッタ カゼガ フイテ
 ヨワッタ カゼガ フイテ
 困りました、風が 吹いて。
 困った、風が 吹いて。

- [4m] ウン ウ マ アシタラ コンデ マー ハダケヤラ
 ン コレモ アシタラ コンデ マー ハダケヤラ
 うん まあ あしたあたり これで 畑やら
 ン これも あしたあたり これで 畑やら

アシタラ：～ラは「～など、あたり」、口語で「～なんか」に近いの意味。共通語の複数の接辞とは用法が異なる。複数を示す働きもあるが、前に付く語の指示限定を避ける働きもある。すなわち、“ぼか

しのラ”。多くの場合は言外に指示対象以外の存在を含意する。いろいろな名詞につき得るが、キョーラ、アシタラ、イマラなど相対的な時を表すもの、ギラ（私）ラ、ワッ（おまえ）ラ、トッサ（お父さん）ラ、トー（同）ラ、イネ（妻）ラ、オッカ（お母さん）ラ、カー（同）ラなど人を示す語に多用される。本文では、マメ（豆）ラ、アズキ（小豆）ラ、ヌカ（糠）ラ、イエ（家）ラにも現れる。これらは、高知県方言にも類例を見いだすことができる（上野智子 2001:79-100）。会話の場にいる相手にラを用いれば、直接相手を名指ししないことで、多少の敬意を表すことがある。報恩講で本家に招かれて退出する際の御礼で「さあ、アンサラ（長男）、イネサマラ（家長の妻）、アネサマラ（兄嫁）、どうも、ありがとうございます」（『白峰村史下』p.285）の記述がある。それぞれラがついた人は本家の一個人を示し、複数いるのではない。また、ギララは自分一個人を表す場合にも多用される（129-6 参照）。これは共通語の「私ら」、また富山方言オラッチャ（おれたち）などは、具体的な指示内容が必ずしも複数ではないこともあり、珍しい例ではない。

ハダケ：本文注2)の[da]有声音は間違いなし。ただし、「畑」は語彙的なもの。

- [5m] タンボヤラエ マアット ンナ カゼデ ツブレテシモーテ ンデー ア
 タンボヤラエ マワット ンナ アノ カゼデ ツブレテシモーテ ンデー ア
 田んぼやらへ 回ると みな 風で つぶれてしまって それで
 田んぼやらへ 回ると みんな あの 風で (作物が)つぶれてしまって それで

タンボ：127-5 ターを参照。

ンナ：本文注3)で述べられている「成節的 n」のある[nŋa]は間違いなし。ンから始まる語のひとつ。ンナ「皆」HLとンナ「赤ん坊」MFとアクセントで対立。

- [6m] メニモ アテラレヘン ナセシヤ ナイカシラント オモテ
メニモ アテラレンホドニ ナッチョッチャヤ ナイカシラント オモテ
 目にも あてられないほどに なっては いないかしらと 思って。
 目にも あてられないほどに なっているのではないかしらと 思って。

メニモ：メー「目」などの1音節語は普通長音で現れる。

アテラレヘン：～ヘンは白峰方言では用いない。レンの母音部分で有声のh（非音韻的なもの）が聞こえたものか。

ナセシヤ以下：ナッチョッチャヤ（<ナル+チョル+ヤ）といているという。

- [7f] オ キョーモ イコト モッタケツド アノ
 オ キョーモ イコト オモタケツト アノ
 ええ、きょうも 行こうと 思いましたけれど
 ええ、きょうも 行こうと 思ったけれど

ケツト：逆接の接続助詞。本文の全てのケツドはケツトであるという。ケツトの前はこの 127-7 にあるように、用言が直接続くほか、ノダ形ヤが現れ、オモタ+ヤ（～イ）+ケツトともなる。

- [8f] イケナンダ ナ ナサケテ
 イケナンダ ナ ナサケテ
 行けませんでした、情けなくて。
 行けなかった、困りはてて。

ナサケテ：注7)「ナサケナクテ」の略か」とあるが、むしろ「(やるべき多くの仕事が目の前にあって) 困っている」の意味。

(p. 125)

- [1m] ゴゼンチューワ イッペン ハダケマーリ シトッタケツドガ
 ゴゼンチューワ イッペン ハダケマワリ シチョッタケツトカ
 午前中は 一度 畑周りを したのだけれども、
 午前中は 一度 畑周りを していたのだけれども、

シトッタケツドガ：シチョッタ+ケツト+カとっているという。チョル、チョッタは継続相または結果相を表す。二つの相を形式では区別できない。ここでは継続相。トルは現在の白峰の老年層はほとんど用いないし、過去においてもトルは用いていなかったという。話者にはチョルに聞こえるという。また、124-7にあるようにケツトカの子音は全て無声音。

- [2m] ソノジブンニワ アンマリ カゼモ キセー ツェ ツヨナーナシ
 ソノジブンニワ アンマレ カゼモ キテー ツェ ツヨナーナシ
 そのころには あまり 風も (言いさし) 強くないし…。
 そのころには あんまり 風も 来て 強くないし、

アンマレ：実際の聞き取りではアンマリとの区別は難しいが、話者の内省ではアンマレが本来形という。

ツヨナーナシ：「強くないし」に意味。ツヨナーナルシ「強くなるし」のいい誤りか。

- [3f] フーン ホンナニ (ソデー) ダイソード シタニヤン
 フーン ホンノニ (ソッデー) ダイソードーシタ ニヤー
 ほう。ほんとうに (それで...)大騒ぎ しましたね。
 ふーん。ほんとうに (それで...)たいへんなことでしたね。

ホンノニ：「本当に」に意味。ホンナニは用いない。よく用いられる副詞。127-1も参照。

ダイソードーヌル：「(事態が) 大変なことになる、(自分が) 大変な目に遭う」の意味。「人が大騒ぎする」意味ではない。

ニヤン：ニヤンは聞かない。ニヤーを用いる。

- [4m] マー アシタラ イクチュート ソレワ モー アー ミラレモ
 マー アシタラ イクツチュート ソレワ モー アー ミラレモ
 まあ、あしたあたり 行くと、それは もう 見られも
 まあ、あしたあたり 行くと、それは もう 見られも

アシタラ：「ぼかしの～ラ」。日時によく用いられる。124・4の注参照。

ミラレモ：「見られる」が普通。現在の話者は「見れもせん」も可能。

[5m] センジャロ
 センジャロ
 しないだろう。
 しないだろう。

ジャロ：推量の文末詞。他にヤロ、イロ、チャロも異形態としてある。～ンの後の音韻環境では、ジャロが現れる。

[6f] コレデ ボンモ モ コレデ オモシロニモ ナイシ
 コレデ ボンモ モ コレデ オモシロニモ ナイシ
 これで 盆も もう これでおもしろくも ないし...。
 これで 盆も もう これでおもしろくも ないし...。

オモシロニモ ナイシ：話者によれば、形容詞の～ニモナイの用法は耳にしないという。現在に伝わっていない古い用法か、あるいはオモシロナイシのいい誤りか。

[7m] オモシロネア オドリモ タタンワ コンデ
 オモシロナイ オドリモ タタンワ コンデ
 おもしろくない。踊りも できないだろう、これで。
 おもしろくない。踊りも 成立しないだろう、これで。

ネア：aiが融合しかけた母音は、話者は用いないと言う。

オドリモタタン：踊りが集団になって成立すること。

[8f] タタン ヨワツタモンジャ
 タタン ヨワツタモンジャ
 できません。困ったものです。
成立しない。困ったものだ。

[9m] ヨマツタモンジャ ヤツパ トシガ ヨツテモ アー ポンニワ
 ヨマツタモンジャ ヤツパ トシガ ヨツテモ アー ポンニワ
 困ったものだ。やっぱり 年が 寄っても 盆には
 困ったものだ。やっぱり 年が 寄っても 盆には

(p. 126)

[1m] チト オドロ オドランナント オモテ
ヘット オドロ オドランナント オモテ
 ちょっと おどらなければならないと 思って
 ちょっと おどらなければならないと 思って

ヘット:「ちょっと」の意味。チトは用いない。録音でもこういっているという。126-4を参照。

オドランナン:「～しなければならない」。子音語幹動詞「踊」odor-a-NnaN、母音語幹動詞「見」mi-NnaNの形式。「する」はセンナン。「踊らヌ(否定)成ラ(許される)ヌ(否定)」=「踊らないのが許されない」→「踊らなければならない(義務)」であろう。すなわち、オドランナンの両方のンとも、助動詞ム(意志)から生じたのではないというのが私見である。「成る」を含む二重否定から「(肯定的な)義務」のムードが生じたと見る。参考までに144-5(次稿)にカエツテミンナルマイジャ(帰ってみなければなるまいジャ)がある。この場合、「帰って見ヌ(否定)成ル(許される)マイ(否定推量)」=「帰って見ないことが許されないであろう」→「帰ってみなければなるまい」のように変化したと推定する。踊ランナンも帰ッテ見ンナルマイも、その「義務」は二重否定に由来すると考える。ちなみに共通語「行かなければならない」も二重否定が潜んでいる。

[2m] ガンバッチョッタイニ

ガンバッチョッタイニ

張り切っていたのに。

張り切っていたのに。

チョッタイニ:チョッタ「ていた(継続相過去)」+イニ「のに」。チョッタヤニとも。(チョッタ)イニはイケット「～のだけれど」、イシ「～のだし」と平行的。「のに」はイニのほかヤニ、ジャニ、チャニの異形態をもつ。行くヤニ、行ったイニ(ヤニ)、行かんジャニ、来っチャニ(「来る」+ヤニ)。

[3f] ホヤ トシガ ヨツテモ オドツテシテ ウリシサト

ホヤ トシガ ヨツテモ オドツテ シテ ウリツシャト

そうですよ。年が 寄っても 踊って うれしいことだなあと

そう。年が 寄っても 踊って ね うれしいことだと

シテ:本文注2)に「シテ」は助詞。「オドツテ」の強調形。」とあるが、シテは間投助詞で文中のいろんな場所に現れる。126-5 オドレンワ シテ(文末)、133-9 へーガ「稗が」シテ、136-3 イーツテ「稗飯というのは」シテ、138-8 シルラデモ「汁などでも」シテ、138-9 ミソラトワ「味噌などとは」シテ、など。

ウリツシャ:ウリシ(嬉しい)+ヤ(のだ、ことだ)+ト(引用)から。

[4f] モテ ヘット ケッコナ ベーデモ キテー (オー) ホシテ

オモテ ヘット ケッコナ ベーデモ キテー (オー) ホシテ

思って 少し いい 着物でも 着て うん そして

思って 少し いい 着物でも 着て ん そして

ケッコナ:「よい」の意味。指す意味内容は共通語より広く「きれい、美しい、清潔な」などをこの一語で表す。反意語はミーニキ(見た目が悪い)、キタニヤ(汚れている)、メンドナ(不快感を与える)。マイナス評価の区分が細かい。

- [5f] オドロト オモチョッタケツト オドレンワシテ
 オドロト オモチョッタヤケツト オドレンワ シテ
 踊ろうと 思っていましたけれど、踊れませんよね。
 踊ろうと 思っていたのだけれど 踊れないわ ねえ。

オモチョッタヤケツト：ケツトの前にヤが入っている。「思っていたのだけれど」の意。ここでのヤはノダ形の一形式。ノダ形の形態素 {ヤ} は /ヤ/ ~ /イ/ ~ /ジャ/ ~ /チャ/ の異形態をもつ。生まれたヤ、生まれんジャ、生まれっチャ。ンの後 /ジャ/、ルの後 /チャ/ (ただし、ルはッと変化)、他では /ヤ/ (行くヤ、読むヤ、良いヤ。ただし、過去形タの後で、何かが続く形は /イ/ も現れる。生マレタ-イ-ケツト。 /ヤ/ でも可) が原則。これらは音韻的に条件付けられていて、他の関連する語、{ヤッタ(のだった)}、{ヤニ(のに)}、{ヤロ(のだろう)}、{ヤシ(のだし)}、{ヤコ(のか)} なども並行的。例えば {ヤロ} の異形態は /ヤロ/ ~ /イロ/ ~ /ジャロ/ ~ /チャロ/ が音韻環境に応じて現れる。筆者の話者は、 /ジャ/ はンの後にのみで現れるが、さらに古い世代では上記の /ヤ/ の環境でも /ジャ/ が現れるようだ。生まれたジャ、行くジャなど。この項目に関連するテキストの他の例、126-2、127-8、129-2、130-6、131-4、133-10、135-8、135-9などを参照。

- [6m] オドレン
 オドレン
 踊れない。
 踊れない。
- [7f] ホンノニ ダイソド シタ
 ホンノニ ダイソド^ー シタ
 ほんとうに 大騒ぎ しました。
 ほんとうに 大変なことに なった。

ダイソドシタ：125-3を参照。

- [8m] マ スモーモ ナイグライヤロ
 マ スモーモ ナイクライヤロ
 まあ、すもうも ないくらいだろう。
 まあ、すもうも ないだろう(この様子だと)。

~クライヤロ：「このままこの状況が続くと~こうなる」という推量。状況判断による推量。

- [9f] アーン マダ スモークライ アルザー
 アーン マダ スモークライ アローザイ
 それでも まだ すもうくらいは あるでしょう。
 いやいや まだ すもうくらいは あるのではないの。

アローザイ：ザーは用いない。ザイとっている。不確かな情報に関して、それ相手に確認をする用法。

現代口語では「んじゃない」に近い。推量、伝聞によく付く。ここでのアローは推量。また、「ナオッタチュザイニャ」の例文（『白峰村史下』p.279）は伝聞。「出産した（ナオッタ）というというんじゃないの」の意味。

- [10m] スモークライワ アルモシラーズ
 スモークライワ アルモシラーズ
 すもうくらいは あるかもしれない。
 すもうくらいは あるかもしれない。

アルモシラーズ：「あるかもしれない」。～カモではなく、カを介さずにつく。

(p. 127)

- [1f] ホンノニ ヨワツタニャ
 ホンノニ ヨワツタニャ
 ほんとに 困りましたね。
 ほんとに 困りましたね。

- [2m] マ スモーデモ アリヤ ヘットワ ニギワシモシラズニャー
 マ スモーデモ アリヤ ヘットワ ニギワシモシラズ ニャー
 まあ、すもうでも あれば 少しは にぎやかになるかもしれないね。
 まあ、すもうでも あれば 少しは にぎやかかもしれないね。

ヘットワ：「少しは」の副詞。

- [3m] フーン コンノ コトシワ ナンジャラ トシガ ヨイト
 フーン ホンノン コトシワ ナンジャラ トシガ ヨイト
 ふうん。ほんとに ことしは 为什么呢。年(回り)が いいと
 ふうん。ほんとに ことしは なにやら 年(回り)が いいと

コンノ：注2)に「「ホンノ」と言っているかもしれない」とあるように、ホンノンかホンノニといつているという。

- [4m] モテ ウリシト オッタケツドニャー
オモテ ウリシテ オッタケツト ニャー
 思って 喜んで いたのですけれどもね。
 思って 喜んで いたのですけれどもね。

ウリシト オッタケツド：注3)に「うれしいと思っていたけれどね」とあるが、「思って」が省略されているのではない。「形容詞+テ オル」の語法がある。「うれしい状態でいた」の意。ここではおそらく一時的な状態をさす。サビシテオッタ「寂しく居た」など。また、「偉い坊さんがゴザツチョッタ」など存在の動詞+ Chol も可能。

- [5m] サンジャワイ ハダケヤ ターエ マアツテミテモ ヤッパー

シャンジャワイ ハダケヤ ターエ マワツテミテモ ヤツパー

そうだね。 畑や 田んぼへ 回ってみても やっぱり

そうだなあ。 畑や 田んぼへ 回ってみても やっぱり

サンジャワイ：話者はサンを用いないという。シャンジャのみ。録音もシャンジャワイに聞こえるという。

ター：タンボより、ターを用いるほうが普通という。『日本語地図第4巻』No.185「田（一区画）」、186「田（集合）」では白峰はターが見える（北陸全般で「一区画」と「集合」の区別なし）。テキスト 124-5ではタンボが用いられているが、録音最初の緊張から加賀、越前での優勢形が現れたものか。

[6m] ツクリワ セーヨー デカ ナルシー（オー）コリヤ

ツクリワ セーヨー デカイ ナルシー（オー）コリヤ

農作物は 勢よく 大きく なるし。（ええ。）これは

農作物は 勢よく 大きく なるし。（ええ。）これは

ツクリワ：ツクリとは農作物の出来の意。

セーヨー：「澁刺としている、元気がよく」の意味。「～働く、～水が出る」などに接続。セーヨーナルは病気が回復した時など「元気になる」の意味。セーガヨイは「嫁は～、若い人は～」などと使用。

デカナル：録音はデカイナル。こちらの方が普通。

[7m] コトシャ マダ トシガ エートー コー オモイヨッタ サルドシワ

コトシャ マダ トシガ ヨイ ット コー オモチヨッタ サルドシワ

ことしは まだ 年が いいと こう 思っていた。申(さる)年は

ことしは まだ 年が よい...と(つまり) こう 思っていた、申(さる)年は

エートー：「よい」は常にヨイ。エーは用いないという。注 6)には「「エー」と「トー」との間に長い休止がある」とある。この休止は、先に「年がよい」という結論を述べておいて、つまりはこう思っていた、と後から説明する手順をとっているための休止である。

オモイヨッタ：ヨルは用いないという。録音はチョッタと聞こえるという。

[8m] トシガ ワルイ チューケツドガ ウソヤナート オモトツタヤー

トシガ ワーリ チューケツトカ ウソヤニヤート オモチヨツタヤー

年(回り)が 悪い というけれど うそだな 思っていたよ。

年(回り)が 悪い というけれど うそだな 思っていたんだ。

ワーリ：「悪い」の方言形ワーリ。3拍の形容詞 CVCui は方言形では CV:Ci となる。

ケツトカ：子音は全て無声音。

オモチヨッタ：常にチョッタ。125-1を参照。

ヤー：ヤ(のだ)が音声的に延びた形。

[9f] ホンノニ コノ トーカオド（オーン）テンキガ ヨーテ

- ホンノニ コノ トーカホド (オーン) テンキガ ヨーテ
 ほんとうに この 10日ほど (そう) 天気が よくて、
 ほんとうに この 10日ほど (そう) 天気が よくて、
 [10f] (ウーン) ホンノニ ヨイ ナツテ コメガ ウリシト
 (ウーン) ホンノニ ヨイニ ナツテ コメガ ウリシテ
 ほんとうに よく なつて 米が うれしいと(思つて)
 ほんとうに よく 実つて 米が、(それを)喜んで

ヨイナツテ：ヨイニナツテといっている。ヨイニは「良い」の副詞的用法、ナツテは補助動詞ではなく、「生つて (実つて)」の本動詞であろう。

ウレシテ：ウレシテ+オッタの用法。127-4を参照。

(p. 128)

- [1f] オッタケツドガ (オーン) ホノ コノ カゼデー
 オッタケツカ (オーン) ホノ コノ カゼデー
 いたけれど (そう) この 風で
 いたけれど (そう) この 風で

ケツドガ：ケツカの子音は全て無声音。124-7参照。

ホノ：ホンノニ「ほんとうに」と言おうとしたものか。

- [2f] ヤラレテシモタ
 ヤラレテシモタ
荒らされてしまいました。
だめになつてしまった。

ヤラレテシモタ：「やられる」の受身としての意識は希薄。「だめになる」の意味。「～ガ ～デ ヤラレル」の格助詞をとる。

- [3m] サンジャワイ モー ミーワ ハイチョランサカイ ツブレワ
 シャンジャワイ モー ミーワ ハイチョランサカイ ツブレワ
 そのとおりだ。まったく 実 は はいつていなから、倒れは
 そうだよなあ。まったく (穂に)実 は はいつていなから、倒れは

- [4m] セメアケツドガー
セマイケツカ
 しまいが。
 しまいけれども。

セメアケツドガー：メアのような融合母音は一時的なものか。音韻の意識としては2つの母音。ケツドガーはケツカ。

- [5f] アンダケ モムト マタ ヨイ ミーガ ハイランシニャー
 アンダケ モムト マタ ヨイ ミーガ ハイランシニャー
 あれだけ もむと また いい 実が はいらないからねえ。
 あれだけ (風が)吹き荒れると また いい 実が はいらないしねえ。

モムト：モムとは「風がいろんな方向から吹くこと」の意味。「波が船をモム」と同じ言い方。モムこと
 によって作物が倒れたことをいっている。

- [6m] ハイラン ハナザカリデ ハナガ オツテシモテ ミモ
 ハイラン ハナザカリデ ハナガ オツテシモテ ミーモ
 (実が)はいらない。花盛りのときに 花が 落ちてしまって 実も
 (実が)はいらない。花盛りのときに 花が 落ちてしまって 実も

- [7m] ナンモ ハイランワイ
 ナンモ ハイランワイ
 何も はいらないよ。
 何も はいらないなあ。

- [8f] オー (オー) マメラモ ホンノ ヒデオーコトニ ナツテ
 オー (モ) マメラモ ホンノニ ヒドイコトニ ナツテ
 そう。(そう。) 豆なども ほんとに ひどいことになって
 そう。(もう。) 豆なども ほんとに ひどいことになって

マメラ：～ラについては 124-4 を参照

ヒデオー：注 3)に母音の融合した[ø]があるが、一時的なものと見られる。このような融合が形容詞に規則的に見られるのではない。音韻的にはオイの母音連続である。

- [9f] ツブレテワノ
 ツブレテワノ
 倒れてはね。
 倒れてはね。

- [10m] シ マメラ ネコギルクライ ナッタサカイナ
 シ マメラ ネコギルクライニ ナッタサカイニャー
 豆などは 根こそぎなるくらいに なったからねえ。
 豆などは 根元から倒れるくらいに なったからねえ。

ネコギル：「根元から倒れる」の意味。

(p. 129)

- [1f] ウ マメデモ (ウーン) アズキデモ (アーン)
 ウ マメデモ (ウーン) アズキデモ (アーン)

豆でも あずきでも
豆でも あずきでも

[2f] ヨワッタモンジャ
 ヨワッタモンジャ
 困ったものです。
困ったものだ。

[3m] アズキラデモ マメデモ イマワ ハナザカリヤシ₂ (オーン)
アズキラデモ マメデモ イマワ ハナザカリヤシニヤ (オーン)
 あずきなどでも まめでも いまは 花盛りだしね。(そうね。)
あずきなどでも まめでも いまは 花盛りだしね。(そうね。)

[4m] マー ナンジャワイ モー アイデ マメラワ ジョートーニ ミガ
マー ナンジャワイ モー アレデ マメラワ ジョートーニ ミガ
 まあ なんですよ もう あれで 豆などは 上等に 実が
まあ なんだよなあ もう あれで 豆などは 上等に 実が

ジョートーニ：注3)に「よく」の意」とあり、これでよい。

[5m] ヘアラン
ハイラン
 はいらないよ。
はいらないよ。

ヘアラン：この母音融合も一時的音声的なもの。

[6f] マ ギララ (ン) トッサラ トシガ
マ ギララ (ン) トッサラ トシガ
 ま わたしたち(や) おとうさんたちは 年が
ま わたし(や) おとうさん(あなた)は 年が

ギララ：ギラは1人称「私」のこと。ちなみに2人称はワレ、ワイ。古い言い方にヌシがある。話し手の男女使い分けはない。ギララは1人称複数を表すこともあるが、ここでは「話し手自身」のこと。相手を含まない。2人称～ラはワッラと言われる。124-4を参照。

トッサラ：ここでは「聞き手」のこと（聞き手と他の人の可能性があるが）を示す。トッサは社会階層では普通の家の家長、あるいは子どもから見た父親を指すが、2人称としてもよく用いられる。～ラについては124-4を参照。

[7f] ヨッタハカイ ジャーデモ ジャンマイワ ワーカイ シュニ
ヨッタサカイ ジャーデモ ジャンマイワイ ワーキャ シューニ
 寄ったから どうでも かまいませんよ、若い 人たちに

寄ったから どうでも いいじゃないですか、若い 人たちに

ハカイ：音声的にこのような現れ方をする場合がある。

ジャーデモ：不定の指示詞ドの系列はドレ(どれ)、ドコ(どこ)、ジャー(どう)、ジャーナ、ジャンナ(ど
んな)、ジャーシテ、ジャンシテ(どうして)、ジャンジャロ(どうだろう)。*ジャージャロはない。

ジャンマイ：金沢方言等の「ジャマナイ」とも関係ありか。注5)には「江戸語の「ダンナイ」に当たる」
とある。

ワーキャ：3拍の形容詞 CV Cai は白峰ではおおむね CV:Cja となる。

シュー：「人たち」を意味する、もっとも普通の語。シュと短いことも。また類語で、シャー、シャとい
う語もある。142-4 (次稿) アンニャンシャ「おにいさん(長男)のシャ(たち)」を参照。

- [8f] (ソレモ ソージャ) マカシテオロツテ
(ソレモ ソージャ) マカシテオロツテ
(それも そうだ。) まかせていようといって。
(それも そうだ。) まかせていましようつて。

マカシテオロツテ：伝聞ではない。言い聞かせるように誘いかけをしている。

- [9m] マ イマントコ ワケーラワ ワカイ シュニ
マ イマントコワ ニヤ ギララワ ワカイ シュニ
まあ いまのところ 若い 人たちに
まあ いまのところ ねえ 私は 若い 人たちに

ワケーラワ：注6)に「言いさし」とあるが、ギララワと言っている。

(p. 130)

- [1m] マカシテオツチャケツドニヤ (オー) ハンニヘッドガ ミットー
マカシテオツチャケツト ニヤー (オー) ハンジャケツトカ ミット
まかせているんだけどね、(そう) そうだけれど 見ると
まかせているんだけどね、(そう) そうだけれど 見ると

ケツドニヤ：ケツトは無声音で、ニヤーは終助詞。

ハンニヘッドガ：注1)に「サンジャケツドガ」のなまり」とあるが、実際ハンジャケツトカと言ってい
るといふ。

- [2m] ヤッパー ハラカワーモンデ ナイトコト (笑)
ヤッパー ハーナモンデ ナイトコト (笑)
やはり
やはり (若い者のやり方は)そんなものではない、ということ。

ハラカワーモンデ：注2)で「意味未詳」とあるが、ハーナモンデと言っているという。指示詞ソ系「そ
んな」にはシャーナ、サーナ、ハーナが存在する。

ナイトコト：「ないということ」の意味。「こと」で終わっているが、「(若い者にやらせたら) そんなものではない」あるいは「(きちんとした仕事は) そんなものではない」という強い断言である。

[3f] (笑)ホンノニ ヨワッタモンジャケツドシテ

(笑)ホンノニ ヨワッタモンジャケツトシテ

ほんとうに 困ったものですけどね。

ほんとうに 困ったものだけけどね。

[4m] ホンノ オマエ ソレニ ハーワ シナビテ ブアブアト

ホンノニ オカゲサンデ ハーワ シナビテ ブアブアト

ほんとうに あなた、それに 葉は しなびて ふわふわと

ほんとうに おかげさんで、それに(若い人に任せても) 葉は しなびて ふわふわと

オマエ ソレニ：はっきりしないが、オカゲサンデといっているように聞こえる。この場合は皮肉である。親しい間柄で相手を指すのにオマエは用いない。用いるとすれば、この場面ではワレかカー(お母さん)である。

ハーワ シナビテ ブワブワ：若い衆がつくる農作物のことを言っている。ブアブアは放置して生い茂った様子を表すという。

[5m] シチョルシ

シチョルシ タオレテモ

しているし

しているし、たおれても(若い者はちゃんとしていない)

タオレテモ：話し手はさらに、農作物の作り方の不満を述べようとしたが、話をさえぎられてしまった。

本文にはこの部分は載っていない。

[6f] ギララワ マ シャー オモチヨツチャ ワーケア シュー

ギララワ マ シャー オモチヨツチャ ワーキヤ シューニ

わたしたちは まあ そう 思っているんです。若い 人たちに

わたしなどは まあ そう 思っているんだ。若い 人たちに

オモチヨツチャ：オモチヨル+ヤ。思っているのだ。ここで文が切れる。

[7f] マカシテ マ トシヤリヤサカト オモテオツチャガー

マカシテ マ トシヤリヤサカト オモテ オツチャガー

まかせて、まあ 年寄りだからと 思っているんだが。

まかせて、まあ (私は)年寄りだからと 思って(こうして)いるんですが。

オモテオツチャガー：130-6 と異なり、ここでは～テ+本動詞オルの用法であろう。「～して(こうして 何もしないで) いる」の意。

[8m] ナンジャ モ シカタナイ ナニ オモタツテ コリヤ

ナンジャ モ シカタナイ ナニ オモタツテ コリヤ
 なんだ、しかたない。なにを 思ったって これは
 なんだ、しかたない。なにを 思っても これは

- [9m] テンサイヤサカイニヤー
 テンサイヤサカイニヤー
 天災だからねえ。
 天災だからねえ。

- [10f] ホンノニ ヨワツタ
 ホンノニ ヨワツタ
 ほんとに 困りましたね。
 ほんとに 困ったね。

(p. 131)

- [1m] オ ソヤサカイ マ オテラマイリデモ シマショー
 オ ソヤサカイ マ オテラマイリデモ シマショー
 うん。だから、まあ お寺参りでも しましょう。
 うん。そうだから、まあ お寺参りでも しましょう。
- [2f] シャーショー マ (笑) マイルガ カンニョヤニヤー
 シャーショー マ (笑) マイルガ カンニョヤニヤー
 そうしましょう。 お参りするのが 肝要ですね。
 そうしましょう。 お参りするのが 大切だね。

シャーショー：シャー指示詞ソ系のシャー（そう）、ショーはスルの意志形、ここでは勧誘の意味。

マイルガ：「参るのが」の意だが、形式名詞がゼロの形、すなわち助詞ガが動詞に接続している。

カンニョ：話者によればこの語は今は用いないという。

- [3m] ン マイルガ カンニョヤ
 ン マイルガ カンニョヤ
 うん。お参りするのが 肝要だ。
 うん。お参りするのが 大切だ。
- [4f] シラガニ ナッタヤシ (オ) アタマワ ハゲルシ
 シラガニ ナッタヤシ (オ) アタマワ ハゲルシ
 白髪に なったんだし、 頭は はげるし...。
 (私は)白髪に なったんだし、(あなたは)頭は はげるし...。
- [5m] マタ ボンニワ シテ エータイキョーガ コノ テラニデモ
 マタ ボンニワ シテ エータイキョーガ コノ テラニデモ

また 盆には そして 永代経が この 寺でも

また 盆には ね 永代経が この 寺でも

コノテラ：収録はおそらく村一番の林西寺で行われたのであろう。この寺を指していると思われる。

[6m] ゴザリマツシャサカイ

ゴザリマスヤサカイ

ございますから。

ございますから。

ゴザリマス：ゴザルは「いる、来る」の尊敬語である一方、「ナンデ ゴザリマシヤロ」のように丁寧語としても用いられる。この会話の話し手と聞き手の間では普通、あいさつことば以外での丁寧表現は不要の間柄であるので、「(永代経が) ある」は永代経に対する尊敬表現と考えた方がよい。

[7f] オー マ ソレオ タノシミ シチョツチャワ

オー マ ソレオ タノシミ シチョツチャワイ

そう、それを 楽しみに しているんですよ。

そう、それを 楽しみに しているんだよ。

[8m] ソレオ タニシミ ショー (笑)

ソレオ タニシミニ ショー (笑)

それを 楽しみに しよう。

それを 楽しみに しましょう。

[9f] (笑)

(笑)

8.2 自由会話2 食物の話 (pp. 132-139) *テキストの冒頭だけ現れる m₂ の話し手は、mx とし、他で専ら現れる m₁ の話し手を単に m とした。

(p. 132)

[1mx] クーモンワ イマト ムカシトワ ダイブ カワツテキタナ コリデ

クーモンワ イマト ムカシトワ ダイブ カワツテキタニヤ コンデ

食べる物は いまと 昔とは だいぶ 変わってきたね、これで。

食べ物 は 今と 昔とでは だいぶ 変わってきたね、これで。

[2m] アー ヤノ ムカシトア ソリヤ クーモンラワ ソリヤ

アー ジャノー ムカシトア ソリヤ クーモンラワ ソリヤ

ああ そうだね。昔と(比べると)、それは 食べる物などは それは

ああ それだね。昔とは それは 食べ物などは それは

アージャーノ：はっきりしない。

- [3m] モー テノウラ カエシタヨーナモンジャニヤ
 モー テノウラ カエシタヨーナモンジャニヤ
 もう 手のひらを 返したようなものだね。
 もう 手のひら 返したようなものだね。

テノウラ カエシタ…:「手のひら返した…」の慣用句。ただし身体部位「手のひら」はテノヒラ。

- [4f] サンジャ ムカシラワ (オノ…) シテ モー イリコヤラ
シャンジャ ムカシラワ (オノ…) シテ モー イリコヤラ
 そのとおりです。昔は いろり粉やら
 そうです。昔などは いろり粉やら

イリコ: 穀物の粉を炒ってお湯で溶いたもの。麦こがし。白峰では後に出る「カマシ」のイリコがよく食べられた。135・1を参照。

- [5f] イーヤラ ナニガ イワシ マ セーゼーデ ゴツソーガ
 イーヤラ ナニガ イワシ マ セーゼーデ ゴツソーガ
 いやら、 いわし。 せいっぱいの ごちそうが
 イーやら、 鯛。 せいぜいで ごちそうが

イー: ひえ〔稗〕だけの飯。

イワシ: ここでいうイワシは糠漬けの塩イワシのこと。生魚ではない。コンカイワシとも。

- [6f] アノ (ン) イワシヤニヤー (サンジャ) ニツシンカ
 アノ (ン) イワシヤニヤー (シャンジャワイ) ニツシンカ
 いわしですね。(そうだよなあ。) にしんか。
 あの 鯛だね。(そうだなあ。) 鯨か。

ニツシン: ここでいうニツシンは糠漬けの塩ニシンのこと。イワシ同様生魚ではない。コンカニツシンとも。他の魚はシマス(塩鯛)、ヒダラ(乾鯛)など。

- [7m] ギララガ オマエ ガッコエ デルヨーナ
 ギララガ オマ ガッコエ デルヨーナ
 わたしたちが あなた 学校へ 行っているような…。
 私が 学校へ 行くような…。

ガッコエ デル:「学校へ行く」の意味。

- [8f] イマラワ シャーナモンジャ ナイワシテ ナンデモ (オツ)
 イマラワ シャーナモンジャ ナイワシテ ナンデモ (オツ)
 いまなどは そんなものではないですよ。なんでも。(そう。)
 今は そんなものではないね。何でも。(はい)

シャーナ: 指示詞ソ系「そんな」については130・2の注を参照。

(p. 133)

[1f] オゴツテ

オゴツテ

ぜいたくで。

選り好みして。

オゴツテ：オゴルは「贅沢する」の意味ではない。「選り好みをいう」こと。子どもの好き嫌いをたしなめるとき、オゴラント食べという。

[2m] ソヤソヤ ギララガ ガッコーエ デルヨーナ**ソヤサカイ** ギララガ ガッコーエ デルヨーナ

そうだそうだ。わたしたちが 学校へ 行っているような

そうだから 私が 学校へ 行くような

ガッコーエ デル：「学校へ行く」の意味。

[3m] ジブンワ アーラ アン マー マズエモンジャッタニヤ イマラ

ジブンワ アーラ アン マー マズイモンジャッタニヤ イマラ

ころには そんな まずいものだったよ。いまなど

頃には (当時のものは)まずいものだったね。今[4m] ユーテモ ハナシワ デキヘン**ユーテモ ハナシワ デキン**

言おうとしても 話は できない。

言っても (その当時の)話は できない。

デキヘン：ヘンは白峰方言では用いない。124-6を参照。

[5f] ハンシラ デキンニヤー**ハンシラ デキンニヤー**

話など できませんねえ。

話など できないね。[6m] アンニヤ ヘーガ (アーン) ヘーワ アノー ナンジャイヤ**ハンジャ** ヘーガ (アーン) ヘーワ アノー ナンジャイヤ

なんだ、 ひえ[稗]は なんだよ

そうだ。ひえ ひえは あの なんだよ

ヘー：ひえ(稗)のこと。母音が融合した形で現れる。

[7m] ハカルワ アノ ムサマステ (ホー ハン…)

ハカルワ アノ ムサマステ (ホー ハン…)

量るには 「ムサマス」という…。

量るのは あの「ムサマス」といって…。

ハカルワ：動詞の基本形に直接助詞が続く。

ムサマス：正式な升と比べてやや小振りの升。決まった単位はなく、たいていは自家製。穀物を節約するための知恵か。

- [8m] キョーバンデ ハカッ アノー ハチゴシカ ナカッタンヤ ソノ
 キョーバンデ ハカッ アノー ハチゴシカ ナカッタヤ ソノ
 「キョーバン」で量ると 8合しか なかったんだ。
 「キョウバン」で量ると あの 8合しか なかったんだ。その

キョーバン：正式な分量の一升です。

ナカッタヤ：ンヤは用いない。用言のル形、タ形の言い切りに直接ヤが付く。

- [9m] ヘーガシテ ヘーオニヤ
 ヘーガ シテ ヘーオ ニヤ
 ひえがね、ひえをね。
 ひえが ね、ひえを ね。

- [10f] イッショニ ツエーテ クーヤッタジャ
 イッショニ ツイテ クーヤッタジャ
 1升到 して 食べたものでした。
 いっしょに 搗いて 食べたものだった。

イッショニ ツエーテ：イッショニ ツイテといっているという。「(ヒエの皮も) いっしょに搗いて (粉にして)」の意味。

(p. 134)

- [1m] オ ソレオシテ アノー ヤンヤー (ヌカ クテ)
 オ ソレオ シテ アノー ナンジャラヤ (ヌカ クテ)
 うん、それをね なんだ、 (ぬかを 食べて…)
 はい、それをね、あの なんだ (ぬかを 食べて…)

- [2m] ソレオ シャーシテ クーヤッタヤナ
 ソレオ シャーシテ クーヤッタヤニヤ
 それを そんなふうにして 食べたものだね。
 それを そうして(ぬかといっしょに) 食べたものだったね。

クーヤッタ：基本形+ヤッタで回想を表す。「～したものだ」の意味。音韻環境に応じて形態素 {ヤッタ} は/ヤッタ/、/ジャッタ/、/チャッタ/の異形態をもつ(126-5参照)。この「食物の話」は、昔を思い出して語られる話なので、この用法が多用される。135-7、136-8、137-10、138-4、138-7など。

[3f] オー (ソレオ …ヤツ ソラ…デモ) ナンジャ ヌカラ
 オー (ソレオ …サカイ ソレーデモ) ナンジャ ヌカラ
 ええ。(それを) なんだ、ぬかなどを
はい (それを それでも) なんだ、ぬかなど

[4f] ヒツモ トラント クーヤッタヤニヤー
 ヒツモ トラント クーヤッタヤニヤー
 ひとつも 取り除かないで 食べたんでしたね。
 ひとつも 取らないで 食べたものだったね。

[5m] オ ソレーデモ ギララ ヤッパ メンパニヤ
 オ ソレーデモ ギララワ ヤッパ メンパニヤ (ン) アー
 それでも わたしたちは やはり「メンパ」にね
 それでも わたしは やっぱり 「メンパ」にね、 ああ

メンパ：注 3)に「昔の食器でうるし塗りのヒノキの曲物」とある。短い円筒状。弁当箱として使用。大きさも様々で、一番大きなイチバンメンパには、一升の飯をつめることができた。上蓋と下受けの両方に飯をいれて合わせて圧縮する。汁物が入られる密閉性の高いものもある。これは蓋が内法に入り、栓のようになる。

ソレーデモ：白峰方言では、文中で対比強調をするとき、その文節の自立語部分の最後の音節を長くする方法がある。ソレーデモはこの強調形式に該当。137-6でも現れる。

[6m] イッパイカラ ニハイカラ クイヤッタニヤ
 イッパイカラ ニハイカラ クーヤッタニヤ
 1ぱいも 2はいも 食べたもんだね。
 1杯も 2杯も 食べたものだったね。

クーヤッタ：基本形+ヤッタで「～したものだ」回想を表す。134-2参照。

[7f] サンジャ ソレガ アタラデニヤー
 サンジャ ソレガ アタラデニヤー
 そのとおりです。それが、(そうは)行き渡らないでねえ。
 そうなんだ。 それが もらえなくてね。

アタラデ：アタルとは「(配って) もらえる」こと。「～しないで」の未然形+デの形式がある。

[8f] (ソレガ アーア アレガ…) イリコガ
 (ソレガ アタランサカイ コリヤ…) イリコガ
 いろ粉が
 (それが もらえないから これは…)イリコガ

イリコ：132-4、135-1を参照。

- [9f] ゴッソヤッタヤシニヤー
 ゴッソヤッタヤシニヤー
 ごちそうだったんですからねえ。
 ごちそうだったからねえ。

(p. 135)

- [1m] アーア イリコガ カマシイリコガ ゴッソヤッタ
 アーア イリコガ カマシイリコガ ゴッソヤッタヤ
 ああ、いり粉が「カモアシいり粉」が ごちそうだった。
 ああ、イリコが カマシイリコが ごちそうだんだ。

カマシイリコ:「カマシ」はシコクビエ(四国稗)のこと。穂の形状が鴨足に似ていることから付いた名前という。注1)に「鴨足」という野生植物とあるが正確ではない。野生植物ではなく、稗や粟にならぶ穀物的一种である。カマシイリコはカマシを挽いてイリコ(炒った粉を熱湯で溶いたもの)にしたもの。箸で搦って、別の小皿にとった砂糖や醤油につけて食べたという。そば粉と混ぜたイリコもある。

- [2f] ゴッソヤー (オ) ソリヤ モー イッカキヤト ユート
 ゴッソヤー (オ) ソリヤ モー イッカキヤト ユート
 ごちそうです。(うん。) それは もう、雪か[搔]きだと いうと
 ごちそうだ。(はい) それは もう 雪かきだと いうと

- [3f] カマシバツカリナ イリコオ ヒーテワ クー ソレガ
 カマシバツカリナ イリコオ ヒーテワ クー ソレガ
 カモアシばかりの いり粉を ひいては 食べる。それが
 カマシばかりの いり粉を ひいては 食べる。それが

カマシバツカリナ:白峰方言では共通語「～ノ+名詞」に対応する「～ナ+名詞」の例が多く見られる。チョコットナ(少しの)、タクサンナ(たくさんの)、ドツテナ(どっちの)、～ノカタナ(～の方[方向]の)など。

- [4f] ゴッソヤッタ
 ゴッソヤッタヤ
 ごちそうでした。
 ごちそうだったんだ。

ヤッタヤ:ヤッタ+ヤ(のだ)の形。

- [5m] ソレガ ウレシテ アーア ア ボヤ イッカケツ ユート ヤ
 ソレガ ウレシテ アーア ア ボーヤ イッカケツ ユート ギララ
 それが うれしくて 坊や 雪かきしろと いうと

それが うれしくて 坊よ 雪かきしろと 言うと わたしは

ポーヤ：ポーは「男の子」の意味。中学生くらいまで。ヤは呼びかけの終助詞。「坊よ」。138-3でも現れる。

[6m] カキニ アガッチ ヤッタヤ

カキニ アガッタヤ

(雪を)かきに (屋根へ)あがって やったよ。

(雪を)かきに (屋根へ)あがったんだ。

アガッチ：これはアガッテの誤植か。実際はアガッタヤと言っているという。

[7f] トンデ デッチャッタヤナー

トンデ デッチャッタヤニヤー

走って 出ましたね。

大急ぎで (家から)出たものだったね。

トンデ：トンデ～は「大急ぎで～する」の意味。ただし「トブ」単独を「走る」意味で使用しない。138-4も参照。

デッチャッタ：デル+ヤッタ。「出たものだった」の回想の用法。134-2参照。

[8m] ア ソヤソヤ イマイラト ムカシノ ソリヤ クーモンラワ

ア ソリヤソヤ イマラト ムカシノ ソリヤ クーモンラワ

ああ そうそう。いまと 昔の それは 食べる物などは、

ああ それはそうだ。いまと 昔の それは 食べ物などは、

[9m] (オー) イマノ クーモンラワ ギラ

(オー) イマノ クーモンラワ ギララ

(ええ。) いまの 食べる物などは、わたしは

(ええ。) いまの 食べ物などは、わたしなどは

[10m] ビンポーニンジャゲッドガ ム ソリヤ ムカシ ユオナラ

ビンポーニンジャケツカ ム ソリヤ ムカシ ユーナラ

貧乏人だけれども、そりゃ 昔(のこ)を いうならば、

貧乏人だけれども、そりゃ 昔(のこ)を いうならば、

ゲッドガ：全て無声音でケツカ。

(p. 136)

[1m] マー ア イマノ ギララノ クラシワ ジュローノ

マー ア イマノ ギララノ クラシワ ジュローエモンノ

いまの わたしたちの 暮らしは 十郎与右衛門の

いまの わたしたちの 暮らしは 十郎右衛門の

ジュロー：注 1)に「白峰の地主の名。mは「ジュロー」と言い、fは「ジュロモ」と言っているが、後者のほうが念入りな言い方。」とある。しかし、録音ではいずれの場合もジュローエモンか、ジュロエモンと言っているという。また、山岸家の屋号の表記は「十郎右衛門」が一般的で、「十郎与右衛門」は用いないという。

- [2m] ダンナサマガ クラシミタイナモノジャ
ダンナサマガ クラシミタイナモンジャ
 旦那さまの 生活みたいなものだ。
 旦那様の 暮らしみたいなものだ。

ダンナサマガ クラシ：所有を表す助詞ガがある。助詞ノもあり、二つの対立が問題となる。九州のかなり広い範囲で、また近くでは富山県五箇山の上平村方言で、前に付く名詞の対する敬意の差として現れるからである（真田 1990:261-272）。現在の白峰方言についての結論は、両者の差は助詞の前にくる人に対する敬意に関わる待遇的な差ではなく、新旧（ノが新とガが旧）の差、あるいはそこから生じる丁寧さの差である。「～ガ」は「ジゲ（地元）のことば」、「～ノ」は「丁寧なことば」という話者の内省である。方言的な場面あるいはくつろいだ場面では、ガが多用され、非方言な場面あるいは改まった場面ではノが多用される傾向にある。調査の初期段階で「ギラガ手ぬぐい」と「先生ノ手ぬぐい」の差が出たが、素材敬語の差の現れではないことがわかった。ギラガ（私の）、ワイガ（おまえの）、アンニヤガ（長男の）、アレガ（自分の）など、方言的な人称語彙、親族語彙には～ガが付いた方が自然である。一方、先生ガ／ノ、旦那様ガ／ノなどは、どちらも可能である。先生ガ、旦那様ガを使用しても本人への敬意は変わらないし、本人の前でガを使用しても失礼にはならないという。ちなみに、上記アレガのアレは上代語に遡る可能性が高い。上代でのもう一つの1人称ワ(レ)は白峰では2人称(ワレ、ワイ)になっている一方で、アレガは人称に関わりなく「自分の」を意味する語になっている。白峰方言では、例えばアレガコト(事)、アレガモノ(物)、アレガイエ(家)、アレガシゴト(仕事)など、後にくる名詞には制限はない。また、アレニ(自分に)、アレオ(自分を)、アレデ(自分で)などの他の格助詞にも続くことができる（ただし「アレノ+名詞」はやや不自然な言い方という）。例えば「アレデ」の用法、ワイガコトワ {アレデ/ワイデ} セー「おまえのことは自分でしろ」、ギラガコトワ {アレデ/ギラデ} シル「わたしのことは自分でしろ」。上代語アレからの継承は、人称辞から再帰名詞に変化して残っていると見えよう。

- [3f] ハンジャ ジュロモノ イーツテシテ (笑)
ハンジャ ジュロエモンノ イーツテ シテ (笑)
 そうですよ。十郎与右衛門の イというものは
 そうだ。十郎右衛門の イー(ひえ飯)って ね
- [4f] コメイヤツタリヤ ソレオ ミンナニヤ マッチョルクライニシテ
コメイヤツタリヤ ソレオ ミンナニヤ マッチョルクライニ シテ

米イだったから、それを みんなはね 待っているくらいにして

米イだったから、それを みんなねえ 待っているくらいに ね

コメイヤツトリヤ：コメイは米を多く含んだイ（ひえ飯）。ヤツトリヤはヤツタの条件形を表す。タレバ>タレア>タリアと変化したと推定される。過去のテンスマーカの「タ」はタル>タと変化し、タは末尾のルを落としたが、条件形では末尾部分を保存していることになる。

[5f] クイチャヤツタサカイ

クイチャヤツタサカイ ニヤー

食べてやったものですから

食べたいものだったから ねえ

クイチャヤツタ：クイチャは「食べたい」の意味。標準語4拍 CVCVCaiの形容詞は白峰方言では CVCVCjaの3拍語になる。従って、クイタイはクイチャになる。基本形+「ヤツタ」で回想を表す「～したものだ」になり、クイチャヤツタは「食べたいものだった」の意味になる。

[6m] サンジャワイ イエノ イネラワナ (ア)

サンジャワイ イエノ イネラワナ (ア)

そのとおりだよ。わたしの家の かみさんたちはね、

そうだよなあ。私の家の かみさんなどはね

イネ：自分の妻のこと。イネラで接辞のラが付されている。「～たち」の複数形なく、いわゆる「ぼかしのラ」。夫が妻のことをイネというほか、子が母のことをイネということもある。後者の方が古い言い方である。その場合、カー、オッカと同じ意、待遇の差なし。イネは、本人のいないところでその人に言及する場合（他称）にも、直接本人に呼びかける場合（対称）にも用いられる。

[7m] ジューロー シ ア シゴトニ イタ オー ヒキツテニヤ

ジューロモン シ ア シゴトニ イッタ オーヒキツテ ニヤ

十郎与右衛門(の) 仕事に 行った。緒を 引きに行つてね。

十郎右衛門(の) 仕事に 行った。(麻の)緒を 引きに行つてね。

イタ：イッタと言っているという。この直後、ポーズが短い。

オーヒキ：収穫した麻を蒸して柔らかくした後、皮をはいで、繊維質を取る作業。

[8m] ムカシ コーシテ ヒクヤツタ

ムカシ コーシテ ヒクヤツタ

昔は こうして 引いたものだ。

昔 こうして 引いたものだった。

ヒクヤツタ：ヒク（基本形）+ヤツタで回想を表す。134-2を参照

[9f] オーヒキ シチャツタ

オーヒキ シツチャツタ

緒引きをしたものです。

緒引き したものだっだ。

シツチャッタ：シル（する）+ヤッタ。録音はシツチャッタに近いが、この形式は白峰にはない。シル+
 チョル+タならばシツョッタ（していた）となる。

- [10m] ソシテ オーヒキニ イクト ソシテ ソノ ナンジャヤヤ アノ
 ソシテ オーヒキニ イクト ソーシット ソノ ナンジャイヤ アノ
 そして、緒引きに 行くと、 そうすると その なんだ、
 そして、緒引きに 行くと、 そうすると その なんだ、

(p. 137)

- [1m] ヨケ モラエニ イクヤロ (ウーン ヨケ モロテ)
 ヨケ モライニ イクヤロ (ウーン ヨケ モロテ)
 夕飯を もらいに 行くだらう、(ええ、夕飯を もらって…)
 夕飯を もらいに 行くだらう、(ええ、夕飯を もらって…)
- [2m] シャーシット イマノ ア ハンツキ シタヨーナ コメヤケドニヤ
 シャーシット イマノ ア ハンツキ シタヨーナ コメヤケツトニヤ
 そうすると いまの 半つきに したような 米だけれど、
 そうすると 今でいう (白米になっていない)半つきに したような 米だけれど、
- [3m] (ア) ソレオシテ イレタチャロガ
 (オ) ソレオ シテ イレテ アツチャロガー
 それを 入れてあったでしょう。
 それを ね (メンパに)入れてあるでしょう。

ソレオシテ：注4)に「直訳すると「それをば」とあるが、シテは間投助詞。ソレオのあとに間を入れた
 もの。

イレテ アツチャロガー：イレテ+アル+ヤロ（推量）+ガー（終助詞）。

- [4f] ソレオシテ (ソーレア マー) …シテ チーサコラ
 ソレオ シテ (ソーレア マー) ウリシテ チーシャコラ
 それを (それは まあ。) 幼いこどもたちは
 それを (それは まあ。) うれしくて 小さい子どもらは

…シテ：ウリシテと言っている。

チーサ：チーシャと言っている。チーシャは「小さい」の方言形。CVCaiは方言形ではCV:Cjaとなる。

- [5f] マツチヨツチャッタジャー
 マツチヨツチャッタジャー
待っていたものです。

待っていたものだったもんね。

マッチョツチャッタジャー：マツ+ Chol+ヤッタ+ジャー

[6m] イマラノ ママーツテモ ナエ ウリシカッタジャジャニヤ

イマラーノ ママーツテモ ナーイ ウリシカッタモンジャサカイニヤ

いまの ご飯といっても 比べものなく うれしかったものだ。

今の ご飯というものは (そんなものは) ない、うれしかったものだったからね。

ママ：ママは米(10割)の飯のこと。イーとは稗だけの飯、イーママは稗+米の飯。それに対するもの。

イマラーノ ママーテモ…：白峰方言の強調形式。文中で対比強調をするとき、その文節の自立語部分の最後の音節を長くする方法。「イマラノ ママツテモ ナイ」がそれぞれ強調されている。134-5も参照。

[7f] ナエヤ ソリヤ ママツテ ナカッタンヤ

ナイヤ ソリヤ ママツテ ナカッタヤサカイ

比べものないね。それは、ご飯というものは なかったんです。

(今の米飯のようなものは) ない、それは。ご飯は なかったんですから。

[8m] アリヤ マ アリヤ ア ウリシテ…テ

アリヤ マ アリヤ ア ウリシテ…テ

それは それは。

それは それは うれしくて

[9f] シャーナ マーズイモン クチョッタヤケツトガ (オー)

シャーナ マーズイモン クチョッタヤケツトカ (オー)

そんな まずいものを 食べていましたが

そんな まずいものを 食べていたんだけど

[10f] トーノシューワ ジワツイヤツタ (オー アー コメワ…)

トーノシューワ ジワツイヤツタ (オー アー コメワ…)

昔の人は じょうぶなものです。

昔の人たちは 丈夫なものだった。

トーノシュー：「昔の人たち」の意味。注7)にあるようにトーノは「遠～」からか。後(138-1)に出るイマノシュとの対比で現れている。

ジワツイヤツタ：ジワツイは「体が丈夫である」こと。タ形はジワツカッタ。ノダ形過去はジワツイヤツタ。ジワツイヤツタはノダ形過去である。

(p. 138)

[1f] イマノシワ シャーナモン クワンジャケツト ヨーヤデ

イマノシュワ シャーナモン クワンジャケツト ヨーヤデ

いまの人は そんなものは 食べないんだけど 弱くて

今の人たちは そんなもの 食べないんだけど 弱いので

イマノシュワ：シュとは「人たち」、シューとも。類似の語でシャー、シャがある。

シャーナ：「そんな」の意味。cf. キャーナ（カーナ）「こんな」、アーナ「あんな」、ジャーナ「どんな」。

ヨーヤデ：「弱いので」理由を表す。ヨーヤは「弱い」の基本形。タ形はヨーワカタ。テ形はヨーワテ。

ヨーヤデは基本形+デ（理由）であり、テ形ではない。

[2f] ヤチャカンジャ

ヤチャカンジャ

だめです。

だめなんだ。

ヤチャカンジャ：ヤチャカン「だめである」の意味。金沢方言ダチャカンと関係がある。ヤチャカン、

ダチャカンは「埒があかん」から。ジャはノダ形ヤの異形態。

[3m] ハンジャ ハンジャ ア ポーヤ ヨケ モライテコイト

ハンジャ ハンジャ ア ポーヤ ヨケ モライニ イツテコイト

そうだ、そうだ。「ああ、坊や 夕飯 もらいに行って来い」と

そうだ、そうだ。あ「坊よ 夕飯 もらいに行って来い」と

ポーヤ：ポーは「男の子」の意味。135・5 参照。ヤは呼びかけの終助詞。

ヨケ：夕飯のこと。地名子（小作）がオヤッサマ（地主）の家に雪かきの奉公にいくと、手間として家

族分の夕飯がもらえる。地名子の父親は、雪かきの道具を持って帰らなければならないし、作業で着物が濡れているので、一旦帰宅する。手間の夕飯をもらいに行くのは子供の仕事だった。

[4m] ユート オイツ チテ（笑）ウリシテ トンデイクヤッタヤ

ユート オイツ テテ（笑）ウリシテ トンデイクヤッタヤ

言うと、「はい」と言って 喜んで 走って行ったんだ。

（父が）いうと「はい」と言って うれしくて 大急ぎで行ったものだったんだ。

オイッ：白峰の一般的な返事は「オー」、「オイ」である。「オイ」はやや丁寧。使用の男女差はない。

トンデイクヤッタヤ：トンデイクは「大急ぎでいく」の意味。ただしトブ単独を「走る」意味で使用し

ない。ル形+ヤッタは「～するものだった」という回想。それにノダ形のヤが付いている。

[5f] オーン ソレガニャー（オン）ナーグァ クキラー クキモ

オーン ソレガニャー（オン）ナーギャ クキラー クキモ

そう。それがね、（うん）長い くきづけ

はい。それがね、（うん）長い 漬け物など 漬け物も

ナーギャ：形容詞「長い」の方言形。

クキ：本文注3)に「かぶや大根の茎・葉を塩漬けにしたもの。」とあるが、クキは普通、大根の塩漬けを

指すという。かぶは煮物と酢の物にすることが多く、漬け物にするのは稀という。昔のクキ（大根）は今のものよりずいぶん小さかったという。

- [6f] ホンノ キラズノ クキオ（オー） サゲテ
 ホンノ キラズノ クキオ（オー） サゲテ
 まったく 切らない なっぱを（手に）さげて
 本当 切らないままの 漬け物を（手に）提げて

キラズノクキ：大根の漬け物の葉の部分を取り落としていない丸ごとのもの。

- [7f] クッチャッタジャニヤー
 クッチャッタジャニヤー
 来たんですよえ。
 来たものだったんだよねえ。

クッチャッタジャニヤー：クル(来る)+ヤッタ+ジャ(のだ)+ニヤー(終助詞)。ル形+ヤッタは回想。138-4 参照。

- [8m] サゲテ… ソシテ アノ シルニヤ（ウン） シルラデモシテ
 サゲテ… ソシテ アノ シルニヤ（ウン） シルラデモ シテ
 さげて…、そして お汁はね、 汁などでもね、
 提げて…、そして あの 汁ね、 汁などでもね、

- [9m] イエラノ ミソラトワシテ（笑） ソラ ンマイ
 イエラノ ミソラトワ シテ（笑） ソラ ンマイ
 自分たちの家などの みそなどとはね、 それは おいしい
 自分の家などの みそなどとは(違って) それは うまい

- [10m] ミソヤツテ カーナ デカイナ メンパデ モロテニヤ コシテ
 ミソヤツテ カーナ デカイナ メンパデ モロテニヤ コシーテ
 みそで、こんな 大きな メンパで もらってね、 こういうふうに
 みそだったんで、こんな 大きな メンパで もらってね、 こうして

ミソヤツテ：ヤの過去ヤツタのテ形。「～して、(そして)～して…」のように話が続く用法のテ形。単に「ミソデ」の言い方ではテンスが中和されるが、「ミソヤツテ」では過去の出来事を経験的に述べるもので、ここではテンスが介在する。形容詞過去のテ形～カッテもある。ナカッテ(無)、アツカッテ(暑)。

カーナ：「こんな」の意味。キヤーナとも。

デカイナ：デカイは名詞修飾ではナ形容詞的接続する。ナル形はデカイナル 127-6。

(p. 139)

- [1m] イーオ コー セナニ カタネテニヤ（ウリシソニ）

イーオ コー セナニ カタネテニヤ (ウリシソニ)

イを こう 背中に かついでね、(うれしそうに…。)

イーを こう 背中に かついでね、(うれしそうに…。)

イー：ひえの飯。ここでは文脈からおそらくイーママのことであろう。

セナ：背中のこと。

カタネテ：カタネルは片方の肩を使って担ぐ行為。運搬の袋は、タビノと呼ばれるものが使われた。ちなみに他の運搬の行為は次のとおり。肩にのせて材木をカタネル、片方の肩で風呂敷包みをカタネル、両肩で背中に風呂敷包みをカズク、天秤棒(ニナイボー)でニナウ、もっこを二人でツル、カク、カツグ、赤ん坊をオー。天秤棒の場合、両肩と首の後ろを使って担う場合はニナウだが、片方の肩に棒をのせてバランスを取る場合はカタネルを使う。カタネルは、アクセントが LHHH、カタ(肩)は LH で、語源意識としてつながりを持つと捉えられている。

[2m] ウリシソニシテ ギラ モツテ

ウリシソニシテ キタ モンジャケツト

うれしそうにして わたしが 持って…。

うれしそうにして 来た ものだったけれど…。

キタモンジャケツト：早口で明瞭ではないがこのように聞こえる。

[3f] クキラデモ スベデ (オ) カラゲテ モテクチャッタヤー

クキラデモ スベデ (オ) カラゲテ モツテクチャッタヤー

つけものなども わらしべで くくって 持って帰りましたよ。

漬け物なども わらしべで くくって 持って来たものだったんだ。

モツテクチャッタヤ：モツテ(持って) + クル(来る) + ヤッタ(回想) + ヤ(のだ形)

[4m] ハイ ソー セー ウリシテ ハヨ

ハイ ソー セー ウリシテ ハヨ

「早く そう しろ」。うれしくて「早く

「早く そう しろ。」(と私や兄弟たちが)うれしくて「早く

ハイ ソー セー：これは持って帰った夕飯を早く支度してわけてくれと、母親にせがむ子たちのせりふである。

[5m] ワケテクレヤツテナモンヤ

ワケテクレヤ ツテナモンジャ

分けてくれよ」というようなものだ。

分けてくれよ」というようなものだ。

参考文献

- 岩井隆盛(1959)「白峰(牛首)方言概要」『白峰村史 下巻』、白峰村史編集委員会、pp.276-321
- 岩井隆盛(1962)「白峰方言の分布と変化」『白峰村史 上巻』、白峰村史編集委員会、
pp.425-451
- 上野智子(2001)「高知県方言のラ(一)の暗示性と明示性」『日本語科学』9、pp.79-100
- 小倉学編(1974)『全国昔話資料集成 4 白山麓昔話』、岩崎美術社
- 川本栄一郎(1980)「石川・富山両県における「かつぐ」の方言分布とその歴史」『金沢大学教育学部紀要(社会科学・人文科学編)』29、pp.71-83
- 国立国語研究所編(1970)『日本言語地図 第4巻』、大蔵省印刷局
- 真田信治(1990)『地域言語の社会言語学的研究』和泉書院
- 清水隆久・太田礼子(1988)「白山麓出作りの食」『聞き書 石川の食事』日本の食生活全集
17、農山漁村文化協会、pp.128-179
- 新田哲夫(2002)「石川県白峰方言の形容詞 一語形とアクセント一」平成14年度文部科学省補助金(特定領域研究)研究成果報告書、上野善道編『消滅に瀕した方言アクセントの緊急調査研究3』、pp.143-171